

『移動とことば2』

目次

序章 なぜ「移動とことば」の語りなのか 川上郁雄 1

第1部 「移動とことば」の語りとアイデンティティ

第1章

名前をめぐるアイデンティティ交渉

「ハーフ」の娘と母の「移動」の軌跡から見えるもの

Laura Sae Miyake Mark・三宅和子 16

第2章

湯呑の貫入に投げ込まれた「移動とことば」

尾辻恵美 45

第3章

「が」の正体

痛みをのりこえてひらく花

半嶺まどか 71

第4章

「留学」研究からことばの学習と使用を考える

移動を重ねるスロバキア出身 Denisa の言語レパトリー

岩崎典子 97

第2部 「移動とことば」の語り方と書き方

第5章

「当事者」研究をする「私」のオートエスノグラフィ

カテゴリー化をめぐる

南誠（梁雪江） 128

第6章

「移動する子ども」のライフストーリーとオートエスノグラフィ

聞き手と語り手と書き手の関係を振り返って

リーペレス・ファビオ 153

第7章

German, Japanese and beyond

How my languages made me a Psycholinguist

辻晶 178

第8章

移動とことばをめぐるダイアローグ

異郷に生きる関西出身者の往復書簡より

川口幸大・津川千加子 195

第9章

「移動する子ども」と文学

荻野アンナの文学世界を読む

川上郁雄 219

あとがき 〈個〉の「移動」が照らしだす社会とことば

三宅和子 251

第1章

名前をめぐるアイデンティティ交渉

「ハーフ」の娘と母の「移動」の軌跡から見えるもの

Laura Sae Miyake Mark・三宅和子

1. プロローグ

本稿は、日本で「ハーフ」と名ざされた国際結婚家庭の子どもが、国をまたいで移動し成長する過程で遭遇した出来事や気づきを、その母と共同して語り、相互参照して振り返りつつ、「移動」の意味を考えるエスノグラフィカルな論考である。越境を繰り返しながら、周囲から受ける名ざしと自己の名のりの間で交渉を続け、帰属への希求の中でゆらぐ個人のアイデンティティを、幼いころから「名前」が表象した他者性という視点で捉え考える。

一人の人間の「移動とことば」には、様々な経験と記憶が重なり、それが縋い交ぜになって現在を形成している。その何を掬い取り、何を捨てて語るかは、何をどのように語るか、何が語られないか、何に焦点を当てたいかななどのジレンマが錯綜する難しい選択である。本稿のように、娘と母という、たとえ同様の時間を共有していても異なる視点があり、別々の人生の軌跡がある二人が、どのような視点からテーマを選び、一つの物語として編み上げていくかには、さらなる困難が付きまとう。記憶の中に繰り返し現れるキーワードを選ぶことでそれを乗り越えようと、本稿では個人の生涯につきまとう「名前」に焦点を当てることから出発した。「移動する人」は、異なる環境に身を置くことによって新たに名ざされ、名のりながら、自分とは誰かを

第2章

湯呑の貫入に投げ込まれた 「移動とことば」

尾辻恵美

1. Making people happen

最近 BBC 制作の *The Repair Shop* というイギリスの人気テレビ番組が、オーストラリアでも放映され始めた。このテレビ番組では、参加者が、家の片隅でホコリをかぶって使い物にならないが思い出が詰まった「家宝」に息吹を注ごうと、それぞれの道で一流の職人に「家宝」を持っていく。「家宝」といっても、必ずしも金銭的価値が高いものではなく、第二次世界大戦中にアウシュビッツに強制収容されていた叔母が所有し、収容所の弦楽合奏団で奏でていたバイオリンのように、長い歴史が刻まれたものから、母親がいつも花を生けていた花瓶のような身近なものまで、多種多様なモノがある。しかし、それぞれの「家宝」には思い出や軌跡の痕跡が刻まれている。オランダ製のすり減ったラタンの椅子（ラタンの椅子のスタイル自体が、オランダの東インド会社の歴史を物語っている）を張替える時に隙間から出てきた綿ほこり、花瓶のひび、バイオリンの指板の指痕が人の人生を投影し、ストーリーを語っている。そして、持ち主が「家宝」にまつわる思い出と思い入れを熱く語る時、モノは単なる語られる対象ではなく、その持ち主のライフストーリーを紡ぐ共著者と化しているように思えてならない。そして、社会言語学者の Kell (2015: 442) が Making people happen (人の行動を起こさせる)

第3章

「が」の正体

痛みをのりこえてひらく花

半嶺まどか

金がないなら 海に^が行くさ。
魚があれば 生きられる。
なんくるないさ やってみれ。

(BEGIN 「オジー自慢のオリオンビール」¹⁾)

1. はじめに

なぜ、ことばを学ぶのに、心が痛むのか。八重山のことばを学び、話すときには、他のことばを学んだときとは明らかな違いがある。それは、痛みというネガティブに聞こえるが、抑圧され排除されてきた歴史と、政策的に居場所のあいまいなことばとして扱われる暴力的な側面からの癒しや解放的な感覚にもつながる。マイノリティとされることばを学ぶときに、ことばでは語る事が難しい情動の変化として、恐れや、痛み、葛藤がある。北アメリカのネイティブアメリカンのコミュニティでのケーススタディ

1 作詞：BEGIN 2005年、圏点は筆者による。

第4章

「留学」研究から ことばの学習と使用を考える

移動を重ねるスロバキア出身 Denisa の言語レポーター

岩崎典子

1. はじめに

1.1 「留学」という移動の研究から

筆者は、米国で日本語教育に携わっていた1990年代後半から日本への留学による日本語の習得について関心を抱いて留学研究に関わるようになった。その中で、留学する学生の日本語学習・使用への思いや、留学中にそれぞれが置かれる環境と経験の多様性について知り、一人一人の学生の経験や主観の個別性、留学前や留学後のバイオグラフィにも関心を持つようになった。近年、応用言語学における留学研究全般でも、留学する個人が留学中に置かれる環境、それぞれのアイデンティティ形成や人としての成長への関心が広がっている（例えば、Coleman, 2013；詳しくは、Iwasaki, 2019a；岩崎, 2020）。「留学」が単純に「非留学」と比較できる均質性のある環境ではないという理解が高まる一方、第二言語（L2）の習得の一般化の限界も指摘され、個別性をみる事例研究の重要性が認識されるようになった（例えば、Benson, 2017; Larsen-Freeman, 2018）。

筆者にとって個別性の探究は、Iwasaki (2010) で報告した5名のアメリカ人学生の日本留学前後のデスマス体と非デスマス体の使用についての研究が契機であった。5名とも留学前は筆者によるインタビューで主にデスマス体

第5章

「当事者」研究をする「私」の オートエスノグラフィ

カテゴリー化をめぐる

南誠（梁雪江）

1. はじめに

中国残留日本人のアイデンティティは？

日本と中国との間でその帰属意識はどうなっているのか？

その子孫たちの場合はどうなの？

中国残留婦人を母方の祖母に持つ私が中国帰国者研究を始めてから、学術的な場でも日常生活でもそう聞かれることが多い。「大変だっただろうね」と同情のまなざしを向けられることも珍しくない。この言葉には国立大学に勤めるようになった私の努力を褒めたい気持ちもあっただろう。「当事者」¹だからこそ中国帰国者研究を始めたと思う人も多い。たしかに博士後期課程編入試験（2003年）の際には次のように書いた。

「中国帰国者」の一人として、その歴史に参与し、自らの主体性を明らかにするために、「中国帰国者」がいかに過去を総括し、現在の位置を見定め、未来への方向を設定しうるかについて考えたい。

1 当事者をどう定義するかは決して簡単なことではない。本稿ではとりあえず中国帰国者であることとして用いる。

第6章

「移動する子ども」のライフストーリー とオートエスノグラフィ

聞き手と語り手と書き手の関係を振り返って

リーペレス・ファビオ

1. はじめに

本章は、複雑な移動の遍歴を持ち複数言語・複数文化環境で育った2人の「移動する子ども」と自身も「移動する子ども」であった私が対話を交わすことで生み出した私のライフストーリーを提示しながら、私がどのようにして自分と他者の持つ差異と向き合い、他者との関係を作り、それを意味付けし、それらがどのような変化を辿ったのか検討するオートエスノグラフィである。そしてこのオートエスノグラフィをもとに、調査者が被調査者を調査するという根源的な常識を覆して、私の「移動とことば」の経験について被調査者に調査されてでしか振り返ることができなかった皮肉な状況を、ローティの「アイロニスト」(ローティ, 2000)と関連付けて検討する。

本章で示す私のライフストーリーは自叙伝的に記述したものではなく、インフォーマントである2人の「移動する子ども」の問題関心に応えた形で記述した点に特徴がある。また、インタビューが複数言語によって行われたというところにもう1つの特徴がある。本研究は、調査者が調査され、それを調査者が考察するというメタ的でアンオーソドックスな形であるが、このような形でしか成し遂げられないある種の自省がある。こうして、私の移動の経験すなわち複数言語・複数文化環境で生きるという経験について新た

第7章

German, Japanese and beyond

How my languages made me a Psycholinguist

辻晶

1. なぜ英語で書くか

I am a researcher studying language acquisition in babies. The path that led me to this career probably begins even before my parents met and is rooted in their own experiences moving around the world and across language borders, their own 「移動とことば」. It might seem curious that I am writing this text in English, since neither my mother, nor my father, nor I are native speakers of English, and I've lived in an English-speaking country for only two years of my life. It might even seem more curious since English is definitely more my language of labor than my language of love. But it is what it is: It is the language that crosses borders, and that thus, for purely pragmatic reasons, has become the language that I automatically start writing in.

I did not actually plan to start my chapter with this observation—it just occurred to me it was worth mentioning now that I sat down to write. It is worth mentioning, because I do think my approach to my own personal history of 「移動とことば」 is decidedly pragmatic. I am acutely aware of the influence it has had on my life, but at the same time I usually do not analyze it more than necessary.

第8章

移動とことばをめぐるダイアログ

異郷に生きる関西出身者の往復書簡より

川口幸大・津川千加子

…黄金糖。赤白青のフランス国旗のような袋に入っており、四角錐の上部を水平にカットしたような形で、味は古風な黄金色の飴ちゃんだ。実家には切らすことなくこれがあり、よくおじいちゃんと一緒になめた。(水田・川西, 2021: 131-132)

1. はじめに — 移動とことばと私たち

「先生、黄金糖って分かりますか？」一人の学生が、彼女のいわゆる「推し」であるところの芸人が上掲の文章の中で言及していたという飴について、その「推し」と同じ関西出身の私(川口)にたずねてきたのだった。「黄金糖、うん、知ってるけど、そういえば、こっちやと見えへんかなあ」その後、仙台市内の何軒かのコンビニやスーパーで探してみたが、黄金糖は売られていなかった。実家の母に「黄金糖って、こっちでは売ってないわ。関西のものなんかな？」とLINEで送ると、「冷蔵庫にあったわ」と黄金糖の写真が送られてきた。今度はそれを学生に告げると、「常備してるものなんですか？」と、上の川西による「切らすことなくこれがあり」という文章と符

第9章

「移動する子ども」と文学

荻野アンナの文学世界を読む

川上郁雄

1. はじめに

幼少期より複数言語環境で成長したという経験そして移動の経験を持ち文学作品を生み出す作家が、今、世界各地に出現している。「モバイル・ライブズ」と呼ばれる現代社会 (Elliot & Urry, 2010) において、人々は、その移動の中に住まい、移動の中で他者と出会い、感じ、生きるという生活を過ごしている。その記憶と心象風景はやがて音楽となり、絵画となり、文学へと昇華する。

本章でははじめに、幼少期より複数言語環境で成長した経験と移動の記憶を持つ作家の作品をいくつか取り上げ、本章のテーマを設定する。その上で、日本で活躍する作家、荻野アンナの文学世界を探究する。そこから、これらの作家の現代性と「移動とことば」の意味を考えたい。

1.1 ジュンパ・ラヒリ

作家のジュンパ・ラヒリ (J. Lahiri) は、1967年にロンドンで生まれた。両親はカルカッタ出身のインド人 (ベンガル人) であった¹。幼少期に両親と

1 以下のラヒリのプロフィールは、小川 (2000) 参照。